

# 山びこ通信

11月号  
2005.11.7  
増刊号

ホームページ <http://www.kitashirakawa.jp/yama.html> 電子メール [taro@kitashirakawa.jp](mailto:taro@kitashirakawa.jp)

電話 781-3215 (山の学校) 781-3200 (幼稚園) / FAX 781-6073 (山の学校・幼稚園共通)

## 第6回 ミニミニようちえん



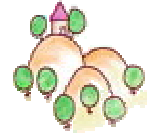
「クリスマスグッズをつくろう！」(無料)

12月3日(土) 午前10時~11時

場所 第3園舎(つき組のおへや)

対象 未就園児(年齢は問いません)とご家族

## 第6回 ふれあいサタデー



「大文字山登山」(無料)

11月19日(土) 午前9時30~11時30分

集合場所 別当公園

対象 在園児・卒園児とご家族

\* 卒園児の方は詳細につきましてはお電話ください。

なお雨天の場合は、第3園舎で「お楽しみ会」をいたします。

## 第17回 青春ライブ授業!



「数学をする人たち

オイラー・ガウス・そしてリーマンへ」(無料)

12月9日(金) 午後7時~8時30分

講師: 福西亮馬 (山の学校数学講師)

場所: 第3園舎 対象: 中学・高校生・保護者一般

## 第4回 ラテン語のゆうべ



「ラテン語は面白い」(無料)

11月11日(金)

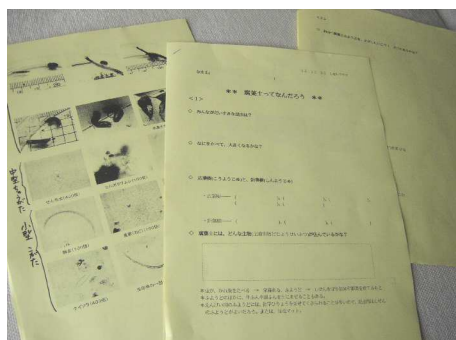
開演: 午後8時~9時30分 講師: 山下太郎

場所: 第3園舎 対象: ラテン語に関心のある方

## 『しぜん』 担当 山下育子・山下太郎

秋になり、ドングリ、クヌギ、野ブドウの実、色とりどりの落ち葉、ヤツデの葉、ヤマボウシの実などが、子どもたちからクラスに届きます。また、この日“ノコギリクワガタの雌”のお客さんもありました。春からみんなで共に過ごしてきたので、仲間意識とともに共有できる話題が増えました。この日も机の上の紅葉の落ち葉からお話がはじまりました。

10月25日のクラス テーマ“腐葉土ってなんだろう”



「みんなの大好きな昆虫は何？ その昆虫が幼虫の間は、何を食べて大きくなるのだろう？」  
『腐った木』『腐った葉っぱ』『昆虫ゼリー？』『木の汁(樹液)』『土』...と意見が出てきます。

今日は特製プリント3枚。思いついたこと、知っていることを次々と書き込んでいきました。お家で飼った経験もある大好きな昆虫のことからはじまり、スラスラとエンピツがはしります。



『いくつ書いてもいいの？』



『えっと、ひらがなひらがな』



集中して書いていきます



お山の中の広葉樹の葉を観察しながら・・・サクラ、クヌギ、カシ、クス、クリなど。身近な針葉樹には・・・マツ、ヒノキ、スギ、タケなどがあつたね。ドングリ系の葉が腐ってできる腐葉土がとてもよい腐葉土だそう。

「土の中には、どんな生物(土壌生物)がすんでいるかな？」  
『ダンゴムシ』『ワラジムシ』『ハサミムシ』『ハムシ』『ミミズ』『ヤスデ』『ムカデ』『ゲジゲジ』

など、たくさん意見が出ました。目に見えないくらいのせん毛虫、アメーバ、カビ、細菌などもあります。土の中の生き物が土中の有機物や枯れ葉を食べることで栄養のある腐葉土が作られ、昆虫の幼虫だけではなく、私たち人間もそうしてできた土から収穫する作物を毎日享受していること、また落ち葉や腐葉土が雨を吸い込んで土壌を守ってくれていることなどについても一緒に考えてみました。一見気持ち悪がられる虫たちにも、自然を守る一員として大切な役割があります。そうしてできた豊かな土「腐葉土」は、多くの命を育てている命の源です。



ではこれから、お山に腐葉土を探しに行こう！そしてその腐葉土を使って植物を植えることにしました。



すっかり膨れた大きな球根



観察後、みんなで出発！



「黒くてやわらかな土があるある」



「やった！クワガタの幼虫が出てきた」



「腐葉土いっぱいおとれたよ。中に幼虫入ってるけど」



「手の平大のカブトの幼虫だぞ！」



「このへん、いい土だね」



「腐葉土取れたよ、おまけつき！」

みんながスコップで腐葉土がとれたところで、つぎは花壇へ移動。

### 【順序】

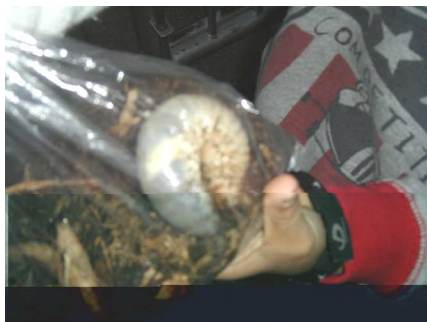
1. 草抜き
2. 土をたがやす
3. 集めた腐葉土をまぜる
4. 新しい土もまぜる
5. 球根を同じ方向へ向けて置いていく
6. 15cmくらい深く掘って植えていく
7. 水をたっぷりとかける



「そうね、この辺ね。」



「このくらいの間隔でいいかなあ？」  
「15cmくらい？ 16cmはだめなの？」



『あーあ、中の腐葉土はこのでっかいカブトの幼虫のごはんだし、あげられないなあー』



< 陽のあたる日の花壇 >  
~きれいな花が咲きますように~

耕すこと、土を混ぜること、深く球根を植え込むこと、平らにすること、すべてに相当の力が必要でした。皆の分業と協力の結集です。腐葉土と一緒に出てきた幼虫を思い、花壇の中へは袋から腐葉土をパラッと少しだけ提供してくれたのがとても可笑しかったのですが、早速昆虫の赤ちゃんを大切に思う気持ちがよく伝わりました。最後に、ホースリールを一人ずつ手に持ち水をたっぷり撒いている時には、それぞれに達成感があったことでしょう。3時50分~5時20分を過ぎてしまい辺りは暗くなっていましたが、心に残るお山の中での自然体験でした。

(文責・山下育子)

## 『ことば1年生』

担当 山下太郎

### 絵を描くように字を学ぶ

今のお子さんはクワガタやカブトムシが大好きです。授業前には、みな競うようにノートに虫の絵を描いています。描いても描いても飽きることなく描き続けます。「ああ、無心になるってこういうことだなあ。」としみじみ感じる瞬間です。先日、少し早めに教室に行くと、一年生の男の子が、二年生の男の子にクワガタムシの絵をノートに描いてもらっていました。大人目から見ても精緻なクワガタムシの絵ができあがりました。「おおすごい！」思わず私も見とれました。描いた子どもも、描いてもらった子どもも、どちらも満足そうでした。いい場面に出会えたなと思いました。

さて、絵の話をしたのには理由があります。10月に入ってからギアチェンジをし、授業で覚えた俳句をノートに書き取る練習を始めましたが、それまでは幼稚園時代と同様、耳で聞いて復唱していました。子どもたちはまるで「絵を描くように」正確に筆写しようとがんばるのです。実際、文字への好奇心はたいへん強いものがあり、私はひらがなばかりの手本を示すのですが、子どもたちは漢字交じりの俳句を手本として見せろと言います。私はまさか「毬」や「芭蕉」の文字を子どもたちが漢字で正確に書くとはいませんでした(筆順は後で補足指導)。ちなみにこの日扱った俳句は、「行く秋や 手を広げたる 栗の毬(いが) 芭蕉」でした。

むろん、このような純粋な意味での「遊び」は、それが日常化してしまうと「遊び」の意味を失うでしょう。小学校とご家庭で、きちんと漢字の「山」や「川」といった基礎的な練習を繰り返しているからこそ、ここぞというときに「芭蕉」といった難易度の高い漢字にチャレンジしたくなる気持ちも芽生えるのだと思います。裏を返せば、子どもたちの生き生きとしたチャレンジ精神に接するたび、私は日頃の生活の中でしっかりと基礎のトレーニングを繰り返している子どもたちの姿を思い浮かべることができるのです。そして、このチャレンジ精神は、冒頭でふれた昆虫を模写し続ける気持ちとどこか通じるのではないかと直感する今日この頃です。

## 『ことば2年生』

担当 うかじまさる  
宇梶卓

「学び」においては、間違いを犯すことは避けられないことです。

世の中にはパーフェクトな人間は存在しませんから、必ず何らかのミスをしてしまいます。それは学校での勉強もそうですし、社会に出ても然りです。そして一般的に、間違いというのはネガティブなものですから、できるだけ是正することが望ましいとされています。間違いを犯すことは恥ずかしいこと、そのような通念が存在するように思えます。

しかし他方、間違いにはどこか創造的なところがあります。ある事柄について間違いを犯したことに気づいたとき、「自分は何でこんなミスをしたんだろう」と反省し、その意味を深く考え、自分の頭で納得するようになるからです。つまり、間違いには主体的な思考を促すところがあります。逆に、単に与えられた情報(先生が言ったこと、黒板に書いたこと)をそのままインプットしているだけの人間には、ある意味で「間違い」というものは存在しませんし、そこには主体的な思考もあり得ません。

いま「ことば」のクラスでは、授業の冒頭で漢字の小テストを行なっています。生徒たちは、パズル的な感覚があるからでしょうか、漢字が大好きで、喜んで取り組んでくれています。

それはさておき、漢字の小テストをしていると、当然ながら生徒たちはさまざまなミスをします。分かりやすい例では、「新聞紙」の「新」を「親」と書いてしまったり、「毛」を「手」と混同してしまったり。絵本を読んでいて、「地面」ということばを「いけめん」と読んでしまい、「それじゃイケメンだよ」とお互い笑ってしまったこともあります。こういったミスは、子どもの頃に誰しも経験したことがあることなのでしょう。しかし本当に重要なのはここからで、何故そういうミスをしたのかということを生徒たちは考えるようになります。

「新」と「親」、形がすごく似ている。偏が同じだ。それに音読みだと同じ発音だ。そうか、だから間違えたのか。これからは気をつけよう。

こうして、この生徒は間違いを通じて、この二つの漢字についてもっと深く学んだことになります。「地」と「池」についても、漢字は似ているけど偏は違って、地の偏は「つちへん」で「土」の意味、池の偏は「さんずい」で水の意味なんだよ、とこちらから説明したら、「あー、そうなんやー」と言って納得してくれました。

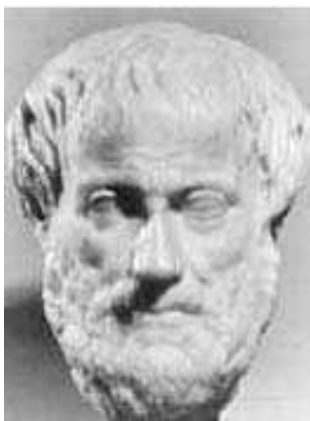
ある高名な哲学者が、「間違いを恐れること、それ自体が間違いだ」と言ったそうですが、至言とも言うべきだと思います。間違えることは決して恥ずかしいことではない、むしろそれを避けてしまうことの方が問題でしょう。小学校も低学年の頃は、まだまだそういったことに対する羞恥心が弱く、その意味でも素直に学べる時期だと言えます。そんなことを考えながら、生徒たちと一緒に学んでいます。日々新たな発見に溢れています。

## 『ことば高学年』 担当 某

「あたりまえをあたりまえに」

秋学期は、テキストの読解と並行して、漢字の学習に力を入れてきました。文章を読んでいる中では何となく理解したつもりになっている漢字でも、改めて読み書きの問題として出されてみると、実は意外に読めない、書けないという経験は誰しもあることだと思います。漢字を「覚える」ためには、徹底した反復練習が、最も遠回りですが、最も確実な学習法です。毎週の漢字テストでは、おそらく初めて見る漢字がたくさん出てくるとは思いますが、間違えたところやあやふやなところは必ず復習を、自分の手を使って覚えたと確信するまで何回も書いてみてください。

わからないところをそのままにせず、わかるまで。これはどこの学校でも塾でも言われていることだと思いますが、言い換えれば、それくらいあたりまえで、ありふれたことだということです。しかも、漢字が覚えられないと言う生徒が、ゲーム等の話になると驚くほど博識であるというのは良くあることで、要するに記憶するということは、普通は誰にでも出来るということになります。最初はどんなことでも多少なり上手く行かないものです。焦らず、じっくり取り組んでいきましょう。



# 日本語の読み書き

中学生 火曜日 pm 8 : 10 ~ 9 : 30

高校生 火曜日 pm 6 : 40 ~ 8 : 00

毎授業、テキストを少しずつ読破しながら、それに基づいた作文、小論文、討論を行っています。こうした「考えることを文章によって表現する」練習が、論理的思考力の鍛錬になることは言うまでもありません。今も、そして将来も必要不可欠となる「考える力」を磨きましょう！



## 『かず』（低年生） 担当 下村麻紀子 1年生クラス

小1かず、中1英語を担当しています下村麻紀子です。

小1と中1という新しい環境になり、新しい教科の勉強を担当していくことで子供たちの成長ぶりを目の当たりにすることができていると感じています。

小1では子どもごとに苦手な部分も少しずつですが現れ始めました。単純に計算を解くだけでなく文章から必要な数字を選び、式をたてるとなると算数だけではなく、国語の読み取る力も不可欠になってきています。計算問題では数字が大きくなり、「わからへん」という言葉で投げ出そうとすることも出てきました。

しかし、横でヒントを出して順序だてて考える手立てがあるとゆっくりとでも解いていきます。1冊が終わると達成感でいっぱいになってまた新しいドリルに挑戦しています。新しいドリルでは最初の部分はやはり簡単に感じるようで1日に15ページも仕上げていきます。ドリルを1冊仕上げたり、1日に多くのページをこなしたりすることは子供たちの自信になり勉強をおもしろいと感じることができるようになります。

小学1年生を見ていて一番驚くのは「学ぶ」ことへの意欲のすごさです。開始の時間には「さあ、勉強や」、終わりのときになっても「まだここまでやんねん」という言葉がよく出ています。彼らの意欲を壊さないようにしたいと思いつつも、そのせいで迎えに来ていただいているお母様、お父様方には心配をおかけして申し訳ありません。

学校にも慣れてきて、これからがだれないようにするための一番大事な部分のひとつだと思います。私もひとつずつ調整をしながらでも彼らに合った勉強の仕方を見つけて全力でサポートしていきたいと感じています。

## 『かず』（中学年・高学年） 担当 福西亮馬 2～4年生 5・6年生

中学年(2年生と3年生がいます)のクラスでは、「マイル通帳」というものがあります。ドリルを1ページすると「ご預」マイルが1増える、という代物です。ずっと昔は地図の上で1マイル分の線を引いて旅行しながら、「旅費」という意味があったのですが、今ではそれも消えて、ただ「マイルがたまっていく」ことに満足を感じています。そのお金で何が買えるわけでもないのですが(一時期クワガタの絵が買えることもありましたが)かえって何も買えない方が2年生・3年生の素朴さには合っているように思います。

内容は算数ドリルなので、100パーセント面白いようなものではないのですが、それでも生徒たちは気よく、お山を登ってきてくれます。私も、登ってくる彼らにこたえたい気持ちから、面白くできるような工夫がないかと、何かこしらえては教室で待っています。

ドリルを見ていると、私はときどき、「お母さん」と呼ばれることがあります。お家で宿題を見てもらうお母さんのイメージが教室に現れるのでしょうか、「これどうしたらいいの?お母さん」と言われます。そんな時、さりげなく光栄にもお母さん役を演じさせてもらっています。

一方、秋学期に新しくできた高学年のクラス(5年生と6年生がいます)は、中学年よりも少し大人びた雰囲気になってきます。「ここが分からないから教えて欲しい」ということを自分から言ってくれます。また、一度私が遅れてきた時でも、あんまり静かなのでまだ誰も来ていないのかなと思って戸を開けたら、ちゃんと自分たちでドリルを開けて、静かに始めていました。なるほど勉強をしに来ているのだという自覚が見られます。

ちょうど一つの学期でドリルが1冊終わりました。今はその中から間違った問題を拾いあげて、確認テストをしてもらっています。また一冊終わるごとに小さな賞状も渡しています。それが2枚、3枚とたまっていくにつれて、自信の種になってくれたらいいと思います。

## 中学生クラス紹介

### 『日本語の読み書き』(中学生) 担当 某

#### 「よいもの」

「友人とは、相手のためになると考えられることを、もっぱら相手のために行なうことのできるような人のことである。そのような人を数多く持っている者が友人の多い人であり、そのような人が優れた人格者でもある場合に、彼はよい友を持つ人なのである。 アリストテレス(戸塚七郎訳)」

中学生クラスのメンバーを担当するのは2年目ですが、昨年と比べて進歩したなあと思うのは、集中力です。ひとりひとりが課題に取り組むときの集中力は、一年前と比較してぐっと良くなったと感じます。この集中力の源がどこから来ているのか、ということ講師の目から見ると、それは各々の学習に対する姿勢の変化ももちろんそうなのですが、個々人の姿勢が変化したことによって、生徒同士で与え合う刺激の質が変化したことが大切なのではないだろうか、と感じています。「ちゃんとやりたい」「しっかりやりたい」という前向きな発言が増えてきていること、そしてそれが自分達自身と、その間にある雰囲気の良い刺激を与えているということ、これらのことがこれからも良い方向に働いていくようになって欲しいと思います。

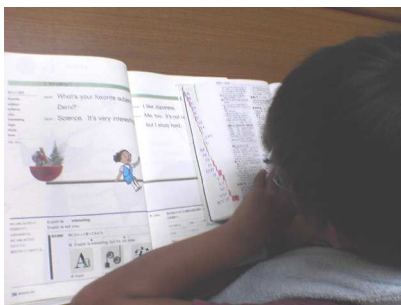
### 『英語の基本』(中1) 担当 下村麻紀子

中1では2学期になって覚えなければいけない単語や表現が増えて苦手意識が生まれ始めている子も出てきているように思えます。



今、その子たちに必要なのは「できる」という意識だと感じています。中学生では定期テストが「できた」と感じられる一番の目安になります。自分の経験も含め、中学生では教科書を「覚える」だけかなりの点数が取れるはずで、そして今完璧に覚えることは将来訪れる受験にも必ずいい方向に役立ちます。

ユニットごとに丸覚えをしてもらっているのですが、まだ長い言葉を覚えることに慣れていないので今は自分がどうやったら覚えやすいかを模索しながらでもいいと思います。「暗記」しなければという難しい考えではなく、好きな歌を覚えるようにすらすらとフレーズが出てくるようになれば怖いものなしです。ご家庭でも曜日や数字などの簡単な英単語を言い合うことも英語に対する苦手意識の払拭になると思います。中学2年生までの勉強でその後が大きく変わります。



時間の許す限り、教科書の暗写にチャレンジ。

学校にも慣れてきて、これからはだれにしないようにするための一番大事な部分のひとつだと思います。私もひとつずつ調整をしながらでも彼らに合った勉強の仕方を見つけて全力でサポートしていきたいと感じています。

## 『英語の基本』(中3) 担当 山下太郎

### 急がば回れ

中学三年生の秋と言えば、誰もが入試のことで焦り出す頃ではないかと思います。英語の場合、入試で問われる内容はどう見ても基礎的な事柄が中心です。ですから集中すれば今からでも十分間に合います。英語に限らず語学の勉強では何より基礎を大事にしてください。

基礎を大切にすると、教科書に書いてある英文を一字一句正確に覚えるということです。ちょうどかけ算の九九を暗記したように、英語を学ぶ上で暗記は避けて通れません。逆に言えば、それができない度合いに応じて入試問題で失点を重ねることになります。

このような考えから、中学三年生のクラスでは秋学期に既習事項の復習を徹底的に行いました。春学期に中1、中2の復習を完了したことが効いていて、残すところは関係代名詞のみとなりました。ここを攻略したら、あとは入試まで長文読解を繰り返すのみです。もちろん、すでにボロボロにした中1から中3までの問題集は、最初から最後まであと何回も繰り返して復習する予定です。

進学塾や私立中学ですと、中2の段階で中3の範囲を終えることもあります。その分定着しない知識が増えるおそれがあります。それを避けるには、いっそう丁寧に基礎を復習する心がけが大切です。既習範囲は、目をつぶっても教科書の内容が音としてよみがえる、または、白い紙の上に教科書通りの内容を再現できる、または、問題集を解く上で、問題の答えが瞬時に浮かぶまで繰り返す、等。

私のクラスの場合、最近目は先を変えて英検3級(中3までのレベル)の問題(一次試験)を解いてもらっています。誰であれ、最初に問題に手をつけたときには凡ミスをするものですが、説明をしてもう一度はじめからチャレンジしてもらおうと、電光石火の早業で全問正解できるものです。当然といえば当然のようですが、この「100パーセント正解する」という爽快な気分を味わうことで、生徒は焦らずに基本的なトレーニングを重ねる大切さを学び、自信を深めていきます。

日本語では「急がば回れ」、英語ではSlow and steady wins the race. と言います。受験勉強を通じて、「急がば回れ」の真意を生徒が実感してくれたらと心から願っています。

## 『数の基本』(中3) 担当 下村昭彦

中学3年生と高校2年生の授業を担当しています。

中学3年生のクラスでは、現在は公立高校受験に焦点をあてて授業を行っています。主に中1、中2の分野の中で特に京都府公立高校の試験に高頻度に出ているもの、また生徒が苦手とする分野を中心に演習を行い実力がつくようにしています。また実際の入試問題を解いてみる中で生徒に受験を実感させ、やる気を出させる工夫も行っています。加えて学校の授業にもついていけるよう、現在学校で教えられている分野を先取りする形で授業を行っています。

受験数学は暗記科目です。理解することは重要ですが、理解できても覚えていなければ実践することはできません。私のクラスではとにかく繰り返し演習を行うことで、生徒に「使える」知識を増やしてもらおうと考えています。



## 高校生・一般クラス紹介

### 『日本語の読み書き』(高1～3) 担当 某

「タレースを笑うな！」

「最古のギリシアの哲学者といわれているタレースは、あるとき天体を観測しながら井戸の中へ落ちたことがあった。ところがこれを見た女中が、あなたはいちばん近くのことにもこんな不器用なくせに、なぜいちばん遠いものを捜しているんですかといって、タレースを笑ったことがあります。ヤスパース(草薙正夫訳)」

問題というのは、いろんなところに発見できます。そのときに、どこに視点を向けるかで見えてくる問題点が違ってきます。タレースは遠い宇宙の彼方へと眼差しを向けていたために、つまりは自分から遙かに隔たったところに問題点を見出そうとしていたために、自らの足元にぽっかりと開いていた「井戸」という大きな問題点が見えていなかった。一方の女中は、タレースとは逆に、井戸は見えていたけれど、自分の頭上を動いている「天体」は関心の外だったというわけです。

このエピソードを読む限りでは両者の歩み寄りが見られませんが、例えば、この事件をきっかけにタレースは足元の井戸の存在を、女中は頭上の天体の存在を見つけた、とすれば、それはそれぞれの世界観にとって大きな変革なのではないかと思います。

さて、ことは高校生クラスでは前年度から引き続き小論文を行っているのですが、秋学期はテキストの文章を読んで、その内容に関する問題設定も自身で行うというのが以前までと違うところです。この問題設定を講師と生徒とがそれぞれ行うことによって、互いの問題意識とその視点の違いを認識することができます。このことによって、文章が、それを書いた人の意図したようには必ずしも読まれていないこと、それを読む人の読み取り方はそれぞれ異なること、つまりひとつのテキストから幾通りもの豊かな解釈が可能であることが実感されるのではないのでしょうか。このような変革体験の積み重ねが、やがて柔軟な思考力に結果すると考えています。

### 『数と自然』(高1～3) 担当 下村昭彦

高校2年生と中学3年生の授業を担当しています。

高校2年生のクラスでは、学校の授業のペースにあわせて問題演習を行い、より深く理解することに主眼を置いて授業を行っています。2年生で習う数学の範囲には「図形と方程式」や「式と証明」、「微分法・積分法」など単元な分野が多数含まれています。また、センター試験で得点源となりうる「数列」や「指数関数・対数関数」などの分野もあり、ひとつとしておろそかできる単元がありません。したがって、日々の授業の中でしっかり定着させる必要があり、毎回の授業の中で演習、解説の繰り返しを行い得点とする力をつけていっています。さらに、高1の内容についての復習を行っており、まずはセンター試験レベルの問題を確実に解けるよう繰り返し演習を行っています。

### 『高校数学の基礎 A・B』(高1～3) 担当 福西亮馬

「教科書。教科書をやればいいんですよ」

最近、ある生徒がこう言ったのが耳に残っています。私は、彼が「とうとう極めてきた」と思いました。そうです。前から言っていたことなのですが、定義や、定理の証明は、教科書に通りに書いてあるのです。しかも体系的に書かれているので、効率よくおさえることができます。そのかわり反比例したように無味乾燥です。それでも、彼は教科書の方を選んだわけです。

教科書は内容が不十分なのではありません。本当はその理解が不十分なのです。そのことに気付いて教科書まで戻って来れる人は、実際、学校での授業時間(一日の勉強でおそらく一番大きな割合を占める時間)をフィードバックすることができます。教科書を閉じたまま試験前になってあわ

てて問題集とにらめっこする人と、教科書のどこに何が書いてあるかを覚えてから問題集にあたる人とは、ちょうど人工衛星から情報を得られる車とそうでない車とくらいの違いがあります。

「教科書」と言った彼はまた、学校で微分や積分を習い始めたことを嬉しそうにしている、数学の教科書を自分で予習しているとも言っていました。そして黒板に  $x^2$  の微分が  $2x$  であること、 $x^3$  の微分が  $3x^2$  であることを、導関数の定義から導いてくれました。そうした彼の生き生きした話しぶりに触れながら、私も「高校になったら微分を習える」と憧れていた頃が思い出されたのでした。

高校生の時の私は、彼のように公式を導こうとも思わず、(教科書の結果だけを)ただ暗記していました。あの時教科書を自分から開いていれば、もっと血の通った理解ができたはずであることを、大学に入ってから気付きました。ですから今の時点で、「教科書をやればいいんですよ」と言える彼には、頼もしさを感じます。彼は数学が好きな生徒ですが、その好奇心がいつまでも伸びていってもらえることを願ってやみません。

さて、これまでは『数の世界』という看板で、主に数学の動機付けを行ってきたクラスですが、冬学期からはさらにギアチェンジを図り、高校数学(それ自体が数学全体の基礎であります)の基礎に目を配ります。そして一般に「ひらめき」と言われるものが、実際は基礎の反復練習から必然的に生じるものであることを納得してもらおうと考えています。

## 『ラテン語講読』(A・B) 担当 山下太郎

### ホットなラテン語クラス！

今お山が熱いです。朝から始まる「幼稚園」はもちろん、夕方から夜にかけての「山の学校」も毎日熱気にあふれています。私の担当するラテン語クラスでは、家庭の主婦の方、地元学生・院生、大学関係の教職員の皆さんなどが集まって、キケローやセネカといった古典作品の解釈に挑戦しています。その真剣さは想像を絶するものがあります。中には片道3時間かけて通ってこられる方もいらっしゃいます。皆さん、忙しい時間をぬってこれだけしっかり予習されているのかと思うと、頭の下がる思いがいたします。私も熱気にほだされてついつい手加減なしに授業しているので、1時間半があっという間に過ぎていきます。

10月からそんなホットな講読のクラス(水曜日)に京大のSくんが入門しました。前川先生に文法を学んだのが今年の4月から2ヶ月ちょっと。最短時間で文法を終え、セネカを読んだとのこと。その後、コプト語を習得するため少しお休みをしますとのことでしたが、無事この言語もマスターされ、「今度はキケローに挑戦します」と再び元気な姿を見せてくれたのでした。

金曜日のクラスではセネカを読んでいます。作品は、『幸福な人生について』です。先を急がずにじっくりと進んでいます。前回の授業では、“*praeceperunt veteres optimam sequi vitam, non jucundissimam*”(昔の人たちはこう教えている、最も楽しい生活を送るのではなく、最も善い生活を送るように、と)という表現が印象に残りました。いつの時代も同じなのでしょうが、「楽しければいい、それが道徳的に善であろうとなかろうと」と考えるのは。しかし、セネカは *voluptas* (快楽)と *virtus* (美德)を峻別します。この *virtus* は勇気という意味も持っています。世の中には、つらくてもやらなくてはならないことがあります。子どもでも知っていることです。それを立派にやり通すとき *virtus* が発揮されたことになります。

神話に例をとると、ヘラクレスは *voluptas* と *virtus* とどちらの道を選ぶか?と岐路に立ったときに、迷わず *virtus* を試す道を選んだことが知られています。ゼウスの正妻ヘラにとって夫の不倫の子ヘラクレスは憎くて仕方がありません。しかし、ヘラの与える艱難辛苦のすべてを克服してつかんだ名誉(クレス)が、ヘラクレスの名には刻印されています。つまり、ヘラ+クレス=ヘラクレスというわけです。ちなみにディズニーのアニメ『ヘラクレス』ではゼウスとヘラの子がヘラクレスとなっていて、ギリシアでは自国の文化を侮辱する映画であるとして上映が禁止されました。

現代に目を向けると、先日のニュースで、ヤンキースの松井選手は「迷ったらいつも困難な道を選んだ」とインタビューで答えていました。彼もまた現代における「*virtus* の人」と言えそうです。セネカを読みながらもつい脱線し、こんな雑談を熱く語ってしまう私です。

# ラテン語を「なぜ」学ぶか

文章・山下太郎

1

ラテン語に実利を求める人はいないはずですが、「なぜラテン語を勉強してはるんですか？」と聞かれることは多いです。本当はギリシア語も勉強しているのですが、それを言うとますます怪訝な顔をされるのでいつもは伏せます。じゃあどうして「山の学校」でラテン語を教えるのか？ということですが、その前に、ラテン語は今ひそかなブームなのです。「クイズ\$ミリオネア」や「タモリの笑っていいとも」をはじめ、テレビ局からの問い合わせはよくありますし、Final Fantasy VII ADVENT CHILDREN のラテン語歌詞は私が担当しました。だから役に立つんだ、とはなりません。

現代日本語の表記を見ると、ひらがな、漢字、カタカナが混在しています。漢字なしの生活は考えられません。同様に、英語をはじめとするヨーロッパの言語を見ますと、ラテン語、ギリシア語から派生した単語が目白押しです。日本の新聞で漢字だけを目で追うと全体の意味がある程度つかめるように、英語の文章に関して、古典語起源の単語を目で追うと速読が容易です。

このように、洋の東西を問わず、古典文化は言語の面で現代に大きな影響を及ぼしています。とくに日本はおもしろい位置にいて、ひらがな以外に漢字とカタカナを持つことにより、古今東西の文化と接する機会に恵まれています。たとえば、日常よく耳にするビデオ (video)、バス (bus)、ウィルス (virus)、データ (data)、メモ (memo) などの言葉は、いずれもラテン語が元のままの綴りで使われています。

語源に関心を寄せることは、個々の文化に誠実に接する上で大事なことだと思います。たとえば、カラオケは海外でも人気ですが、綴りは karaoke となります。私たちは「空っぽ」の「空(から)」と「オーケストラ」(ギリシア語ではオルケストラ)の「オケ」が組み合わせられてできた事実を知っています。つまり「カラオケ」は、日本語と古典ギリシア語が見事に融合してできた日本語です。では、海外の人たちはこの事情をどれだけ知っているのでしょうか。karaoke が普及するほど、この事実を知らない人が地球上にどんどん増えていくことは明らかです。私は何も事情を知らない海外の人には「karaoke は元々日本語だったんだ」と伝えたい衝動に駆られます。judo が日本で誕生したスポーツと知らない人には「柔(やわ)らの道」を説明したくなるのと同様に。

では、その逆はどうでしょうか。日本の歴史を振り返ると、我が国の文化は、常に外国の先進文化をうまく受容してきたとよく言われます。明治開国の頃、急速な西洋化の波にのって、数多くの外国語(英語、フランス語、ドイツ語など)が日本語に訳され、今日でも使われています。この手の翻訳語は無数にありますが、たとえば「大学」という言葉はどうでしょうか。これは今では誰もが知っている日本語ですが、元は university という英語でした。この言葉の元は2000年前の universitas というラテン語に由来します。ほとんど同じ綴りですね。

では、どういう意味だったのでしょうか？英和辞書を見ると、universe (宇宙)という単語も近くに並んでいます。ラテン語から見れば兄弟の単語同士です。ヒントを言うと、uni- には「一」という意味があります。karaoke の kara- に大事な意味があるように、この「一」の意味を考えることは大切です。この説明は長くなるので今は割愛しますが、これに興味を持つ人はラテン語を学ぶ素地のある人と言ってよいと思います。

(つづく)

文責・山下太郎



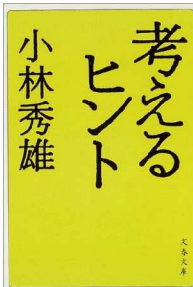
# 読書案内 私の一冊

NO.2

## 『美を求める心について』

小林秀雄著 / 『考えるヒント3』所収 / 文春文庫 1978年

今月の案内人 山下太郎



『考えるヒント3』は評論家小林秀雄氏の講演を集めたものです。どの講演にも心の琴線に触れる言葉遣い、語りかけが随所にあって、高校から大学時代にかけて何度も読み返しました（別売りのテープも何度も聞きました）。本書に収められた「美を求める心について」と題する講演は、私にとってとくにお気に入りのものでした。

「美を求める心」という大きな課題に対して、私は、小さなことばかりお話ししているようですが、私は、美の問題は、美とは何かというような面倒な議論の問題ではなく、私たちめいめいの、小さな、はっきりした美しさの経験が基本だ、と考えているからです。美しいと思うことは、物の美しい姿を感じることです。美を求める心とは、物の美しい姿を求める心です。絵だけが姿を見せるのではない。音楽は音の姿を耳に伝えます。文学の姿は、心が感じます。だから、姿とは、そういう意味合いの言葉で、ただふつうに言う物の形とか、恰好ということではない。あの人は、姿のいい人だ、とか、様子のいい人だとか言いますが、それは、ただ、その人の姿勢が正しいとか、恰好のよい体つきをしているとかいう意味ではないでしょう。その人の優しい心や、人柄も含めて、姿がいいというのでしょうか。絵や音楽や詩の姿とは、そういう意味の姿です。姿がそのまま、これを創り出した人の心を語っているのです。

読み返すたび、「その人の優しい心や、人柄も含めて」というフレーズに何度もきっとさせられたものです。私自身、学生時代は、ややもすると小林氏が批判する「机上の空論」に溺れがちな日々でありましたから。

そういう姿を感じる能力は誰にでも備わり、そういう姿を求める心は誰にでもあるのです。ただ、この能力が、私たちにとって、どんなに貴重な能力であるか、また、この能力は、養い育てようとしなければ衰弱してしまうことを、知っている人は、少ないのです。今日のように、知識や学問が普及し、尊重されるようになると、人々は、物を感じる能力の方を、知らず知らずのうちに、おろそかにするようになるのです。物の性質を知ろうとする様になるのです。物の性質を知ろうとする知識や学問の道は、物の姿をいわば壊す行き方をするからです。例えば、ある花の性質を知るとは、どんな形の花弁が何枚あるか、雄しべ、雌しべはどんな構造をしているか、色素は何々が、という様に、物を部分に分けて、要素に分けていくやり方ですが、花の美しさを感じる時には、私たちは何時も花全体を一目で感ずるのです。だから感ずることなど易しいことだと思いこんでしまうのです。

このくだりは、大学教育にたずさわっていた頃はもちろん、幼児教育にかかわっている今もまた、全行アンダーラインをひきたいところです。日々、子どもたちとともに過ごしていると、耳に入ってくる言葉がまるで詩のように感じられることがあります。先日子どもたちを引率して山道を歩いていると、雨が降ってきました。空を見上げて口を開けて雨水を食べようとする子どもたち。「どんぐりの味がする！」見上げると、たしかにどんぐりの木が……。おもしろいことを言うなあと思いました。

一輪の花の美しさをよくよく感ずるということは難しいことだ。仮にそれは易しいことだとしても、人間の美しさ、立派さを感ずることは、易しいことではありませんまい。また、知識がどんなにあっても、優しい感情を持っていない人は、立派な人間だとは言われまい。そして、優しい感情を持つとは、物事をよく感ずる心をもっている人ではありませんか。神経質で、物事にすぐ感じて、いらいらしている人がいる。そんな人は、優しい感情を持っていない場合が多いものです。そんな人は、美しい物の姿を正しく感ずる心を持った人ではない。ただ、びくびくしているだけなのです。ですから、感ずるということも学ばなければならないのです。そして、偉大な芸術というもの、正しく、豊かに感ずることを、人々にいつも教えているものなのです。

このくだりは暗唱できるほど読み返しました。今の私なら、最終行の余白に「幼児の心もまたしかり」と書き加えたいと思います。私たち大人にとって、美しいものの姿を豊かに感ずる道は、家族の団らん、子どもとの語らいなど、いつも身近なところにかかっています。それに気づくかどうかがかが人生の要諦であるということをおは小林氏の言葉から学びました。

(文責・山下太郎)

## あなたの読書への思いを綴りませんか？

～本が好きな人から 本が好きな人へ～

「山びこ通信」では、ただいま「読書案内 私の一冊」の原稿を募集しています。

好きな本や、感動した本はだれにでもあるものですね。でもそれを人に伝えるのは、ちょっとだけ敷居が高いし、勇気がいります。ただ、そうした「いい物をいい物として」過不足なく文章にあらわしてみることは、やってみると意外にはまるものです。それは書いた本人の滋養にもなります。(ホームページ作成にそうした趣がありますね) いつか読んだ思い出を掘り起こしてみると、「私はこの作品を愛してる」という確認にもなるでしょう。

読書の秋。ぜひ「読書案内」を書いてみて、あなたも本のチチェローネ(案内人：イタリア語でいうところの“Ciceroのよう”)になってみませんか？ お家の方も、ぜひお子さんに勧めてみてください。

締切 12月20日(以後定期的に募集)

字数 800～1200字程度

対象 小学生～大学生・保護者の方

\* 1月の山びこ通信に掲載されます。また掲載前の添削指導もいたします。

\* 提出は「山の学校」福西までお願いいたします。

今月の案内人 福西亮馬



「いつかそんな友情がしてみたかった」と思える、胸の空くような物語。何をあせていたのか昔の自分は「そんなものよりも、何か役に立ちそうな物ばかりを漁って読んでいました。今では反対にそうした昔読まなかった本棚の前に立っていることの方が多いです。

児童書の中で友情を探すなら、サトクリフの描く物語がおすすです。『第九軍団のワシ』は、当のイギリス人作者が、ローマ人とブリテン人との交わりを、共にイギリス人の先祖として活写していて、その中にマーカスとエスカという友が登場します。

ローマ人である主人公マーカスは、百人隊長の筆頭としてブリテンに赴任した矢先、大きな傷を負い、軍人としての栄達の夢を失ってしまいます。完全に癒えない傷に苛立ちながら、身の振り方を考えねばならないマーカス。そんな折に、謎の失踪をした第九軍団の噂を耳にします。

第九軍団は、ブリテンの北の反乱を平定しに、ハドリアヌスの『防壁』の向こうへと消えたきり、戻って来なかったローマ兵たちです。その中にマーカスの父が(指揮官の一人として)いたことから、彼はその探索に志願します。

もし軍旗の《ワシ》が今もブリテン人に祭られていたら、それを奪い返したい。軍旗が帰れば、父の軍団を復活させることができるかもしれない。それが叶わなくても、いつの日か《ワシ》がブリテン人の陣頭に押し立てられ、ローマの脅威となることは防げるだろうと。

マーカスは、その胸のうちを一人の奴隷に告げます。名前はエスカ。彼はブリテン人で、ローマ人によって滅ぼされた部族の出の若者でした。マーカスは彼とは主従の関係よりも、むしろ運命の敗者としての共感から深く結びつけられていきます。

「一緒に行ってくれと奴隷に頼むことはできない。だが」と出立の日にはマーカスは言いません。「友になら頼める」と。エスカは彼の手から解放証書を受け取りながらこう答えます。「これまでお仕えてきたのは、私が奴隷だったからではありません」 そうして二人は一生に一度の狩へと出かけたのでした。

北の部族に潜入し、とうとう《ワシ》のありかを発見することになる二人。しかし取り返した後も、執拗な追手が二人に迫ります。探索から、より困難な逃避行へと移って、物語はいよいよ佳境を迎えます。

マーカスは作品の中でいつか、自分たちにできる事というのは、「傷があっても、それを気にしないで暮らすことだ」と言っているのです。

運命から傷を負い、歴史に翻弄されながら生きていく人間が、あくまでそれを演じ自由人として生きていく、またその生涯の終りに「これでよかった」(作品中では「いい狩だった」と)と言えるために必要な、目に見えない物とは何か この名もない二人のかけがえのない友情が、それを叙述に物語っているように思います。

(文責・福西亮馬)



# 青春ライブ・レビュー

第16回目(2005年10月28日)

題名:『あれもこれも学んでみたい！  
～ 知のネットワーク化』

講師: 前川 裕(山の学校ラテン語講師)



「青春ライブ！」も数えると16回目です。今回の出番は、山の学校でラテン語を教えている前川裕先生でした。

「blankがある」というときの blank と、white という、自分の中で結びつかなかった二つの単語が、ある日突然つながったという例が一つあげられていました。

blank (blank) white (ホワイト)?  
blank (英) = blanc (仏: 白い) = white (英)!

「私は高校生の時フランス語をかじっていたのですが、通学の電車の中でふと、フランス語の blanc (blank) という単語が頭に浮かんで、それに空白とか、白という意味があるのを思い出したのです。

その時、英語の方で突然、blank と white という単語がつながったのです。

もちろんそんなことは辞書にも載っていることです。でも自分で発見できたことが嬉しくて、思わず顔がにやけてきたことを今でも憶えています。それ自体はつまらんことなのかもしれません。でもそれなら、今度はもっと大物を狙ってやろう、という気になってくる。知ることが、次にまた知ることの原動力になるんです。知るとは喜びだから、また知りたくなるんです」

という意味のことを話されて共感しました。

しめくりには、Bon Courage (ボン・クラージュ) と黒板に書かれて、「面白いと思うことには、他人の評価を気にしないで、自分を信じてください。知のネットを広げることは勇気を持つことでもあります」とその場にいる人たちに励ましの言葉を送られていました。

(文責・福西亮馬)

\* 以前、前川先生が書かれた物を紹介します。

「勉強、好きなんだねえ」 誰かにこう言われた時、どう思うでしょうか。私は「変な奴だなあ」という言外の圧力を感じます。つまり、「勉強」とは学校で強制されるもの、分からなくて嫌なもの、時間がかかって苦しいものであり、そんなものが好きなんて変わった奴だなあ、...という憐れみのような感触です。

そんなとき、「ボクは『研究』が好きなんだよ」と返します。「研究」という言葉には、「強制」という響きがありません。時間がかかっていても、苦しいものではありません。むしろ、喜びに溢れたひとときです。「研究」という言葉を使うと大仰な感じですが、自分から好んで学ぶものはみな「研究」である、といってもよいでしょう。

しかし、小学校から大学に至るまで、基本はやはり「勉強 = 教えられること」だと思います。それは、その時は当人に価値が分からないものであっても、将来に開花するための貴重な布石だからです。好きな物ばかり食べていたら栄養が偏るように、好きなことのみを学んでいてもやはり知識のバランスが偏ります。

身体が様々な栄養素によってバランスを保つように、知識もまたさまざまな要素によって組み合わさっているからです。A という事象は、通常 a が原因と考えられるが、実は b によっても、また c によっても説明できるのだ。そのような多様性に気づくことは、人間としての「生きる力」を付けるために不可欠ではないでしょうか。

私は「学ぶこと」が大好きです。いろんなことに手を出してきましたし、今でも手を出し続けています。そんな私には大書店や図書館は宝の山です。自分の専門分野の棚はもちろんですが、全然違う分野の本棚を眺めて歩き、時に目についたものを手に取ってみる。もちろん、分からないところだらけです。でも「何か新しいことに触れた」という喜びの記憶は、いつまでも残ります。それは決して無駄なことをしている時間ではありません。むしろ、それこそが「学び」の本質なのだと思います。(前川 裕)

次回の青春ライブ!は...

12月9日(金)

『数学をする人たち』

(講師: 福西亮馬)です。

# 冬学期生・募集しています！

\* 「どうしようかな？」と考えておられる方は、ぜひ一度クラスをご見学ください。途中からご参加される場合でも、歓迎いたします。

## 平成 17 年度の時間割 冬学期 (12 月 ~ 3 月)

(各クラス 5 名まで)

	4:10-5:10	5:30-6:30	6:40-8:00	8:10-9:30
火	しぜん* (低学年 & 高学年)	ことば低学年 1 年 ことば低学年 2 年 ことば高学年	中 1・数の基本 中学・英語の読み書き 高校・日本語の読み書き	中学・日本語の読み書き 高校数学の基礎 A
水		かず低学年	中 1・英語の基本	ラテン語講読 A ラテン語講読 C 高校数学の基礎 B
木	かず中学年	かず高学年	中 3・英語の基本 高校・数と自然	中 3・数の基本 ラテン語初級入門
金	やまびこクラブ 4:00 ~ 5:30 (年 6 回)		青春ライブ授業! 7:00 ~ 8:30 (年 6 回)	ラテン語講読 B

\* 「しぜん」は、3:50 ~ 5:20、隔週の授業です。

### 小学生の部

『ことば』	低学年 (1 年)	山下太郎
	低学年 (2 年)	宇梶 卓
	中学年 (3・4 年)	
	高学年 (5・6 年)	某
『しぜん』	低学年 (1・2 年)	山下育子・山下太郎
	高学年 (3 ~ 6 年)	山下育子・山下太郎
『かず』	低学年 (1 年)	下村麻紀子
	中学年 (2・3 年)	福西亮馬
	高学年 (5 ~ 6 年)	福西亮馬

講師が「」のクラスは、希望者を 5 名まで受け付けます。希望者が 2 名以上集まった時点から、上記の講師陣により授業が開始されます。

### 中学生の部

『日本語の読み書き』	中 1 ~ 3	某
『英語の基本』	中 1	下村麻紀子
	中 2	
	中 3	山下太郎
『英語の読み書き』	中 1 ~ 3	Fujita
『数の基本』	中 1	宇梶 卓
	中 2	
	中 3	下村昭彦

### 高校生・一般の部

『日本語の読み書き』	高 1 ~ 3	某
『英語の読み書き』	高 1 ~ 3	Fujita
『数と自然』	高 1 ~ 3	下村昭彦
『高校数学の基礎 A』	高 1 ~ 3	福西亮馬
『高校数学の基礎 B』	高 1 ~ 3	福西亮馬
『ラテン語初級入門』	高 ~ 一般	前川 裕
『ラテン語 講読 A』	高 ~ 一般	山下太郎
『ラテン語 講読 B』	高 ~ 一般	山下太郎
『ラテン語 講読 C』	高 ~ 一般	前川 裕

